

韓愈の長編回想詩をめぐって

—杜甫との比較から—

好川 聰

一、はじめに

中唐の最盛期である元和年間前後において、顯著に見られる現象の一つに、韓愈、柳宗元、劉禹錫、白居易、元稹という中唐を代表する文人たちがこぞって長編の回想詩を作っている點が挙げられる。本稿では、過去から現在にいたる自らの半生を回顧した自傳的な詩の他にも、友人とのこれまでの交遊を振り返った詩や、自らの身に降りかかった出來事を中心に敘述した詩なども「回想詩」の範疇に含めることにするが、こうした長編回想詩の代表的な作品とその句數を年代順に並べると下記のようなになる。

貞元十五年	韓愈	「此日足可惜一首贈張籍」一四〇句	古體	元和九年	白居易	「渭村退居寄禮部崔侍郎翰林錢舍人詩一百韻」二〇〇句	排律
貞元二十一年	韓愈	「縣齋有懷」八〇句	古體詩	元和十二年	白居易	「東南行一百韻寄通州元九侍御澧州李十一舍人果州崔二十二使君開州韋大員外庾三十一補闕杜十四拾遺李二十助教員外竇七校書」二〇〇句	排律
永貞元年	韓愈	「赴江陵途中寄贈王二十補闕李十一拾遺李二十六員外翰林三學士」一四〇句	古體詩	元和十三年	元稹	「酬樂天東南行詩一百韻」二〇〇句	排律
	韓愈	「岳陽樓別竇司直」一一二句	古體詩				
	劉禹錫	「韓十八侍御見示岳陽樓別竇司直詩因令屬					

和重以自述故足成六十二韻」二二四句

古體詩

劉禹錫 「武陵書懷五十韻」一〇〇句 排律

韓愈 「答張徹」一〇〇句 古體詩

白居易 「代書詩一百韻寄微之」二〇〇句 排律

元稹 「酬翰林白學士代書一百韻」二〇〇句 排律

柳宗元 「同劉二十八院長述舊言懷感時書事奉寄澧州張員外使君五十二韻之作因其韻增至八十一通贈一君子」一六〇句 排律

白居易 「渭村退居寄禮部崔侍郎翰林錢舍人詩一百韻」二〇〇句 排律

白居易 「東南行一百韻寄通州元九侍御澧州李十一舍人果州崔二十二使君開州韋大員外庾三十一補闕杜十四拾遺李二十助教員外竇七校書」二〇〇句 排律

元稹 「酬樂天東南行詩一百韻」二〇〇句 排律

(貞元二十一年と永貞元年は西暦では同年。すべて五言詩)

この表を見て分かるように、中唐の長編回想詩はまず韓愈から作られるはじめ、次第に他の文人たちに傳播していったことが窺える。これは時代の風潮などという間接的な要因だけでなく、例えば永貞元年の韓愈「岳陽樓別竇司直」に對して劉禹錫が「韓十八侍御見示岳陽樓別竇司直詩」と六十二韻に増やした詩を送り返したり、元和八年に見える劉禹錫の五十二韻の詩(現存せず)に答えた柳宗元の八十韻の詩、また、元和五年や十二年の白居易の一百韻の詩に元稹がすべて同じ韻字を用いて應酬したりと、文人たちの直接の交流によってもたらされたものだといえよう。ただ、韓愈の長編回想詩はすべて古體詩であるのに對して、他は劉禹錫の一篇を除いてすべて排律で作られており、その點で大きな違いがある。これは韓愈が例外というわけではなく、こうした述懐的な内容の詩は本來五言古詩で詠われるべきものと考えられていたのであり、より直接には杜甫の五言古詩形式の回想詩を意識して作られたといえる。杜甫の代表的な回想詩を一覽にすると、次の通りである。

- 「自京赴奉先縣詠懷五百字」 一〇〇句 古體詩
- 「北征」 一四〇句 古體詩
- 「夔府書懷四十韻」 八〇句 排律
- 「往在」 六六句 古體詩
- 「昔遊」 三六句 古體詩
- 「壯遊」 一一二句 古體詩
- 「遺懷」 四二句 古體詩

前の二篇はその前半生において人生の節目に時事と紀行を中心に回顧したもの、後の五篇は晩年に夔州に滞在していた時期に作られたもの

韓愈の長編回想詩をめぐって

で、『杜詩詳註』ではこの五詩は一連の詩作として纏められており、中でも「壯遊」は自身の幼少期から書き起す自傳に近い詩である。これら杜甫の詩は數十句から長いものは一四〇句にも及び、また詩體も「夔府書懷」を除いて五言古詩である。こうした作品群は過去に類例を見ないものであり、韓愈は杜甫に直接影響を受けて回想詩を作ったと考えられる。また、白居易や元稹の二〇〇句の排律に關しても、杜甫には「秋日夔府詠懷奉寄鄭監李賓客一百韻」というこれも夔州で作られた二〇〇句の排律があり、白居易と元稹はこの杜甫が文學史上初めて成し遂げた「一百韻の排律」というジャンルに自らも挑戦して詩を作ったのだといえよう。

杜甫の影響を大きく受けて作られたこれら中唐の長編回想詩に限らず、杜甫という詩人が盛唐よりもむしろ中唐に繋がる要素を数多く持っていることは近年になって盛んに言われていることである。それは紛れもない事實であるが、盛唐の時代に生きた杜甫をあまりに中唐に引きつけては、杜甫と韓愈や白居易ら中唐の文人達との間に潜む文學の本質的な差異を見落とすことになってしまう。中唐元和期の文學の様相を正しく捉えるためには、彼らが杜甫のどの部分を繼承して自分たちの文學に反映させたかを考えるのと同時に、彼らがどのように杜甫という規範からはみ出して個性を打ち出していったか、その雙方を正確に分析する必要があるだろう。

中唐の長編回想詩は文人たちが心血を注いで作り上げた重要な存在でありながら、その句數の長さが災いしてか、これまで十分な研究が成されてきたとはいえない。そこで本稿では、中唐において長編回想詩を最も早い時期に作っている韓愈に焦點をあて、杜甫の詩と比較しながらその特徴について考察を加えたい。³⁾

一一「此日足可惜一首贈張籍」と「北征」

韓愈の長編回想詩はほぼ陽山への左遷を契機として作られているが、これから取り上げる「此日足可惜一首贈張籍（此の日惜しむべきに足る一首 張籍に贈る）」はそれより數年前、貞元十五年に作られた最も早い長編回想詩である。この詩は張籍との交遊の回想と、汴州（現河南省開封市）の亂に翻弄される自己の體驗を描いているが、その冒頭は、

此日足可惜 此の日 惜しむべきに足る

此酒不足嘗 此の酒 嘗むるに足らず

捨酒去相語 酒を捨てて去りて相い語り

共分一日光 共に一日の光を分かつ

と、現在張籍との名殘惜しい別れの宴席にあることを述べ、以下五句目から「念う昔」と回想に入るその内容は、久保天隨の解釋に従えば五段に分けることができる。まず張籍との出会いから韓愈の家に住まわせた經緯を述べる第一段（38句）があり、次に張籍が汴州での科擧豫備試験に合格し、上京して本試験にも合格していく經緯を述べる第二段（39〜56句）へと續いていく。だがこの詩の中心となるのは、當時汴州に本據を置く宣武軍節度使の任にあった董晉が亡くなり、韓愈もその葬儀に参加して洛陽へと旅立った最中に起こった、汴州の亂における韓愈自身の體驗談を描いた第三段（57〜74句）、第四段（74〜112句）である。まず第三段から引用していく。

暮宿偃師西 暮に偃師の西に宿り

徒展轉在牀 徒らに展轉して牀に在り

夜聞汴州亂 夜に汴州の亂を聞き

遠壁行彷徨

我時留妻子

倉卒不及將

相見不復期

零落甘所丁

驕兒未絕乳

念之不能忘

忽如在我所

耳若聞啼聲

中塗安得返

一日不可更

俄有東來說

我家免罹殃

乘船下汴水

東去趨彭城

壁を遶りて行きて彷徨す

我 時に妻子を留め

倉卒として將いるに及ばず

相い見ること復た期せず

零落して丁たる所に甘んず

驕兒 未だ乳を絶たず

之を念いて忘るる能わず

忽ち我が所に在るが如く

耳に啼く聲を聞くが若し

中塗 安くんぞ返るを得ん

一日も更うるべからず

俄かに東來の説有りて

我が家 殃に罹るを免ると

船に乗りて汴水を下り

東に去りて彭城に趨く

最初の「偃師」というのは漢代の頃から存在する縣名だが、ほとんど詩中に登場したことのない小さな縣である。そうした詩的言語として定着していない地名を詩に詠み込み、また、いつの時點で反亂の報を聞いたかを具體的に書き記すことで、韓愈個人の體驗を記録に留めようとする姿勢が感じられる。以下に事細かに記されているのは、汴州に残してきた家族への痛切な思いである。まだ乳離れもしていない我が子が傍らで泣きわめくという幻聽を覺えるほどの不安にさいなまれながら、公務の執行のため引き返すことのできない苦悶の様子が綴られており、私人と公人との間で板挾みになっている韓愈のやるせない思いが傳わってくる。そんな中でようやく、家族が災難を免れて彭

城（現江蘇省徐州市）に避難したと傳え聞いたが、依然離れ離れという状況は變わらず第四段へと續いていく。

第四段では、第三段の倍以上の句数を費やして洛陽から彭城へ向かう苦難の道のが記されている。洛陽に着くやいなや一泊もせず引き返し、馬が倒れるまで走り続ける様子や、道中の節度使からしほしの歡待を受けても、「飲食 豈に味を知らんや、絲竹 徒らに轟轟たるのみ」と心ここにあらずで翌朝逃げるように立ち去る様子が描かれた後、89句目からは次のようにいう。

黃昏次汜水

黃昏 汜水に次り

欲過無舟航

過ぎんと欲するも舟航無し

號呼久乃至

號呼 久しくして乃ち至り

夜濟十里黃

夜に十里の黃を濟る

中流上灘渾

中流 灘渾に上るに

沙水不可詳

沙水 詳らかにすべからず

驚波暗合沓

驚波 暗くして合沓たり

星宿爭翻芒

星宿 争いて翻芒たり

轅馬踣躑鳴

轅馬 踣躑として鳴き

左右泣僕童

左右 僕童泣く

黃昏時に黃河の渡し場である汜水に着いたが、渡ろうにも船が無い。長い時間叫び續けてようやく渡し船がやってきて、對岸まで十里の行程を渡っていく。だが中程で中州に乗り上げてしまい、水面は砂とも水とも區別がつかない。激しい波が逆巻く音だけが響いてきていっそ不安を掻き立てられ、空を見上げると星々は争って瞬いている。こんな状況の中ではどうすることもできず馬は足を跳ね上げて嘶き、左右では召使い達がすすり泣くのであった。

韓愈の長編回想詩をめぐって

このように急ぎたいが爲に夜中にも関わらず黃河を渡った結果、かえって中州に乗り上げて立ち往生してしまった體驗が語られ、思うように進まない旅路の中で絶望感におそわれている様子が描かれている。續く陸路の旅でもこうした絶望感はいっそう増幅される。

甲午憩時門

甲午 時門に憩い

臨泉窺鬪龍

泉に臨みて鬪龍を窺う

東南出陳許

東南 陳・許を出づれば

陂澤平茫茫

陂澤 平らかにして茫茫たり

道邊草木花

道邊 草木の花

紅紫相低昂

紅紫 相い低昂す

百里不逢人

百里 人に逢わず

角角雉雉鳴

角角として雉雉鳴く

「時門」は左傳昭公十九年に「鄭大水、龍 時門の外の洧淵に鬪つ」と見える地名で、甲午の日にしほしその古跡で休息するも、そこから出發すれば濕地帯が果てしなく廣がっており旅の不安を煽ってくる。見渡す限り人の氣配がない廣大さの中で、赤や紫に咲き誇る道端の花々の美しさも、愛でる心理的餘裕も時間的餘裕もなく苦難の旅を急がねばならない。そのような韓愈の身にとっては、逆に殘酷なまでに胸を締め付けてくる美しさに感じたであろう。

この句をもって長々と續いた苦難の道のがようやく終わりを告げ、續いて二月の末にようやく徐州の南端にたどり着いて従兄弟と再會したことを記した後、「誰か云う 艱難を経たりと、百口 天殤無し」——これまでの道のりを困難を経てきたと誰がいおうか、一族全員一人も死なずに濟んだのだから、と再會の喜びを記して第四段を締め括っている。

以上が第三段と第四段の内容であるが、このくだりは清以前の評者が既に言及しているように、杜甫の「北征」の影響を受けたものといえる。「北征」はこの韓愈の詩と同じく一四〇句の五言古體詩であり、當時左拾遺の官にあつた杜甫が宰相房琯の罷免を辯護した咎で休職を命じられて歸省した際に作られたものである。鳳翔縣の行在所から家族のもとへ歸省していくその道中の様子と、家族との再會の様子を中心に記しており、家族のもとへと向かう道中の自分自身の體験を事細かに記載していく基本的な結構など、この韓愈と杜甫の詩とは共通している點が多く見受けられる。

しかしながら、この二つの詩全體を讀み比べたとき、その抒情性には大きな違いがあることに氣付かされる。「北征」全體を引用することとはできないが、簡單に言えばこの詩では免職されてむなしく故郷へ歸る失意の自己を描き出しており、それが詩全體に暗い影を落としてゐる。「北征」の中で最も異彩を放つ家族との再會を記した部分も、その段の最初を引用すると、

況我墮胡塵 況んや我は胡塵に墮ち
及歸盡華髮 歸るに及びて華髮盡く
經年至茅屋 年を経て茅屋に至れば
妻子衣百結 妻子 衣は百結なり
慟哭松聲迴 慟哭して松聲迴り
悲泉共幽咽 悲泉 共に幽咽たり
平生所嬌兒 平生 嬌とする所の兒
顔色白勝雪 顔色 白きこと雪に勝る
見耶背面啼 耶を見て面を背けて啼き
垢膩脚不襪 垢膩して脚に襪はかず

牀前兩小女 牀前の兩小女
補綻纒過膝 補綻して纒かに膝を過ぐ
というように、白髪頭になって歸ってきたら妻子は何度も縫い繕ったぼろぼろの服を着ていて悲しみにむせび泣く様子が描かれている。そしてこの段の最後では「新たに歸りて且つ意を慰むるも、生理焉くんぞ能く説かんや」といい、再會の慰めを一時のものとして暗い氣持ちに沈んでいる。このように再會の喜びと同時に、自分は出世もできず家族に貧しくつらい生活を強いている苦しみが見え隠れしており、そうした悲哀が引用部分に見られるような杜甫の鋭い觀察眼によって描き出される家族の様子と相乗して、深い感動を與えるのである。

この「北征」に限らず、杜甫の長編回想詩は基本的に時代の流れに翻弄される中で志が遂げられなかった失意の自分、不幸な自分を描いている。そして自分一身の嘆きに留まらず、ひろく世界全體が持つ不幸への怒りや嘆きへと押し廣げていくのが杜甫の長編回想詩の特徴であり、それに對して自分が無力であることを自覺している點が、さらに深い悲哀を讀者に感じさせているともいえる。いわば杜甫の詩では、そこから逃れることができない強い呪縛を伴った悲哀が表現されており、悲哀の抒情の枠組みから大きく外れることがないのである。

一方で、韓愈の詩では第四段の最後に家族と無事に再會した喜びを述べているが、最後の第五段（117句）でもこのように續いていく。

僕射南陽公 僕射 南陽公
宅我睢水陽 我を睢水の陽に宅す
篋中有餘衣 篋中に餘衣有り
盎中有餘糧 盎中に餘糧有り
閉門讀書史 門を閉じて書史を讀み

清風 窓戸に涼し

日念子來遊 日び子の來遊するを念う

子豈知我情 子 豈に我が情を知らんや

別離未爲久 別離 未だ久しきを爲さざるに

辛苦多所經 辛苦 多く經し所なり

對食每不飽 食に對して毎に飽かず

共言無倦聽 共に言いて聽くに倦む無し

連延三十日 連延 三十日

晨坐達五更 晨に坐して五更に達す

僕射の南陽公とは、この地の節度使であつた張建封のことを指す。

その幕下に入り衣、食、住すべてをあてがわれた充足した生活を送つていゝ中で一人涼風に吹かれながら讀書に耽つていたわけだが、君（張籍）が訪ねてきやしないかという私の思いが通じたのか、思いもよらず突然君が訪ねてきてくれた。續く「別離 未だ久しきを爲さざるに、辛苦 多く經し所なり」といふのはもちろん張籍を見送つた後に起つた汴州の亂での體驗（第三、四段）を指す。お互いそうした多くの苦勞を経験してきたからこそ、久々の再會というわけでもないのに話題が盡きることなく、一ヶ月の間毎日朝から席を並べて語りはじめて明け方にまで及ぶという有り様であつた。様々な話題の中でもこの席でまず語られるのは、張籍と別れている間に起つた汴州の亂での體驗であろう。

以上が第五段の前半部分だが、ここで問題にしたいのは、この場面で韓愈が張籍に對して汴州の亂での體驗を語るとき、どのような心情で語つていゝかということである。第三、四段はこれまで見てきたように當時韓愈がいかに辛く苦しい思いで旅を續けてきたかを述べてい

る。だが、それを張籍に語つていゝ際には、杜甫の「北征」のように悲しみに沈んだまま語る、といった様子は感じられない。むしろ逆に、過去の辛く苦しい體驗をよき思い出として喜々として語る姿が想像できるのではないだろうか。思いもかけず張籍との再會を果たした中、これまでの體驗を一刻もはやく話したいという衝動を抑えきれず、寝る間も惜しんで滔々と話し出す——家族と離れ離れになつて不安にさいなまれたり、洛陽からとんぼ返りしたり、節度使の歡待も上の空で明け方に逃げ出したり、夜に無理矢理黃河を渡つて中州に乗り上げた、百里進む間に一人一に出會わなかつたり——こうした辛く苦しかった體驗を過去のものとして樂しそうに語つていゝように感じられるのである。いわば過去のつらい體驗が「回想」といふプロセスを経ることによつて、面白い體驗をしたという思い出に昇華されているのだ。面白いとか樂しいという言葉では語弊があるかもしれないが、少なくともそれを「回想」することによつて、自己の現在の狀況からは切り離されたものとして對象化しているのである。「回想」といふ構造を作品世界に持ち込み、「回想」して語り合う自己と友を設定することによつて、杜甫にはない抒情の可能性を引き出し出している點が、盛唐以前の文學と大きく異なつていゝのである。

第五段の後半は詩の終結部であり、再び出立する張籍へ悲しみをこらえながら餞別の言葉を贈り、その別れの宴會の様子が冒頭四句へと返つていく。しかし、これまで長々と述べてきた辛く苦しい體驗が過去の思い出として語られることによつて悲哀から脱却していゝことは、この詩全體の抒情性にも大きな影響を及ぼしていゝ。この詩全體は、汴州の反亂という苦難を乗り切つて、家族や張籍と無事に再會を果たし得たその喜びを詠うことに主眼が置かれていゝといえよう。そのた

め、詩の最後に悲しみをこらえて張籍に餞別の言葉贈る中にも、こうして非常な艱難にも負けず無事に再會を果たし得たのだからまた必ず巡り會えるだろうという想いが言外に響いてくるように感じられる。そしてまた、題名でもあり、冒頭の一句でもある「此の日惜しむべきに足る」という臺詞も、この長い長い回想を経てもう一度この言葉に立ちもどると、そこに韓愈の張籍に對する無限の惜別の想いが傳わってくるのである。

韓愈の「此日足可惜一首贈張籍」は、杜甫「北征」に見られるような家族に對する描寫や、「自京赴奉先縣詠懷五百字」の「朱門は酒肉臭きに、路には凍死の骨有り」などのような斬新な表現に富んでいるわけではない。一句一句そのものは平凡とさえ言える。しかし、個々の句は平凡であっても張籍との出會いから汴州の亂での體驗、そして再會へと詳細に綴っていくことによって、「此の日惜しむべきに足る」というこの一句自體ではごくありふれた表現に簡単な言葉では言い盡くせない重みを持たせている。いわば長い句數を費やすからこそ表現し得る抒情性というものを描き出しているのである。それは杜甫の長編回想詩で描かれるような悲哀とは異なる。回想というプロセスを経ることによって、昔は辛く苦しかった體驗を、その辛さから脱却して、過去のよき思い出、面白い體驗として張籍に語っているところに、韓愈が最初に作ったこの長編回想詩の新しさがあるのである。

三 陽山左遷時期の回想詩

前章では回想によってもたらされる抒情性の違いについて主に論じてきたが、この章では回想の中で描かれる自己表現について考察した

い。「此日足可惜一首贈張籍」の次に執筆される長編回想詩はやや間をおいて六年後の貞元二十一年、今の廣東省に位置する陽山の縣令に左遷された際に書かれた「縣齋有懷」まで待たねばならない。この五言八十句の古體詩は冒頭、

少小尙奇偉 少小より奇偉を尚び
平生足悲吒 平生 悲吒するに足る

猶嫌子夏儒 猶お子夏の儒を嫌い

肯學樊遲稼 肯えて樊遲の稼を學ばんや

事業頽皋稷 事業 皋稷を窺い

文章蔑曹謝 文章 曹謝を蔑す

濯纓起江湖 濯を濯いで江湖に起こり

綴珮雜蘭麝 珮を綴りて蘭麝に雜う

悠悠指長道 悠悠として長道を指し

去去策高駕 去去として高駕に策つ

と少年時代から書き起こす。荀子に「賤儒」と評された子夏を嫌い、孔子に「小人」と言われた樊遲が志した農業などは學ばず、政治においては古の名臣である皋陶や后稷を目指し、文學においては曹植や謝靈運を侮蔑するなど、挑戦的で過剰なまでの自信と自負に満ち溢れた自己像を描き出しているが、實際には政界へのつてもなく科擧の落第や低い官職を轉々とする苦勞がこの後に述べられている。そして、今現在左遷されている陽山がいかにも中原と異なった氣候や風土を持っていて嫌悪すべき地であるかを述べた後、新皇帝の即位に伴って恩赦が我が身にも行われた暁には、官を辭めてのどかな隱居生活を送りたいと記して締めくくっている。

以上が「縣齋有懷」の大まかな流れであるが、古體と排律の違いは

あるものの詩題と句数の形式面は杜甫の「夔府書懷四十韻」に倣っており、また、青年期の自負が打ち破られていく様子を自傳的に綴っていくその内容面は、同じく杜甫の「壯遊」を意識して作られたといえる。「壯遊」は杜甫が晩年夔州に滞在していた頃に書かれた作品で、十四、五歳のころから既に文壇に出入りして班固や揚雄の再来であると褒められたことから書き起こし、五句目よりさらに幼少期に遡って當時の様子を綴っていく。

七齡思即壯 七齡にして思い即ち壯なり

開口詠鳳皇 口を開きて鳳皇を詠ず

九齡書大字 九齡にして大字を書し

有作成一囊 作有りて一囊を成す

性豪業嗜酒 性豪にして業に酒を嗜めり

嫉惡懷剛腸 惡を嫉みて剛腸を懷く

脫略小時輩 脫略す 小時の輩

結交皆老蒼 交を結ぶは皆な老蒼たり

飲酣視八極 飲酣にして八極を視

俗物都茫茫 俗物 都て茫茫たり

最初に七歳にして鳳凰の詩を詠する、つまり詩を創作していたとあるが、杜甫は他にも「進雕賦表」の中で「七歳より詩筆を綴る所」と述べているように、この頃から詩を作ることができた事は杜甫の自慢だったようである。そして大人のように酒をたしなんで同年代の少年達などは眼中になく、年配の人とはかり交流している少年杜甫の姿は、背伸びして大人の眞似事をしているようなほほえましさを感じさせよう。

このように小生意氣に見えるほどの自信に溢れた少年時代が描かれ

韓愈の長編回想詩をめぐって

ているが、吳越を遊覽した頃の様子を綴った後、37句目からは、

氣劇屈賈壘 氣は屈賈の壘を劇し

目短曹劉牆 目は曹劉の牆を短とす

忤下考工第 考工の第に忤下し

獨辭京尹堂 獨り京尹の堂を辭す

と、その頃の意氣は屈原や賈誼に戦いを挑まんばかりで、曹植や劉楨をも眼下に見下すほどであったと述べておきながら、科擧の試験には落第してしまい、たった一人を立ち去っていく挫折が描かれる。このあたりから最初に述べていた自信と自負に翳りが見え始め、徐々に詩の調子は變わっていく。再び各地を放浪する様子や、宰相房琯の罷免を辯護して皇帝の怒りを買って左拾遺の職を去ることになった経緯などを綴った後、最後の方の98句目になると、

小臣議論絶 小臣 議論絶ゆ

老病客殊方 老病 殊方に客たり

鬱鬱苦不展 鬱鬱として展べざるに苦しみ

羽翮困低昂 羽翮 低昂に困しむ

などと結局何もなし得なかった自己の姿が描かれ、最後は今の戦亂を治める英俊の出現を待ち望んで詩が終えられており、自分にはどうすることもできない無力感がにじみ出ている。また、「壯遊」と同時期に作られた「往在」も、安祿山の亂を追憶して後半は「安くんぞ得ん…」以下延々と政治の抱負を語るものの、最後は「老い去りて飄蓬に苦しむ」と詩を結んで、何も成し得ぬまま老け込んでしまった我が身を嗟いており、「壯遊」に近い抒情性を持っている。

既に川合康三氏が『中國の自傳文學』（創文社 一九九六年）の中でこの「壯遊」に關して指摘しているように、杜甫の長編回想詩の特

徴は、昔は持っていた強い青雲の志が老いて失われていく過程、そうした自己の内面の變化を描くことにその新しさがある。そして、韓愈の「縣齋有懷」は全體の流れだけでなく、個々の表現面においても、例えば曹植を見下す表現など、杜甫の「壯遊」と非常に共通点が多いといえるだろう。⁽¹⁾しかしながら、韓愈が描く自己というのは、杜甫の自己表現の中には見られない要素もある。一つには、杜甫は落ちぶれていく自分の運命に抗うことなく、その運命を受け入れた上でそれを嘆き悲しんでいる面があるのだが、韓愈にはどこかそれを受け入れがたく思っている節がある。少なくとも官界で出世できなかった事を自分の不才のせいにはしない。「縣齋有懷」の先ほど引用した部分の最後では、悠々と名馬に鞭打って長安への出世街道の道を目指し進んでいたといっておきながら、11句目からは最初の挫折を以下のように表現している。

誰爲傾國媒

誰か傾國の媒爲らん

自許連城價

自ら連城の價を許す

初隨計吏貢

初め計吏に隨いて貢せられ

屢入澤宮射

屢しば澤宮に入りて射る

雖免十上勞

十上の勞を免ると雖も

何能一戰霸

何ぞ能く一戰して霸たらん

「傾國の媒」とは前漢の李延年という歌手が自分の妹を武帝に賣り込むために、武帝の前で傾國の佳人の歌を歌ったのがきっかけで妹が寵愛された故事に基づき、自分には出世への仲立ちとなってくれる人物がないことをいい、續く「連城の價」は趙王が持つ和氏の璧を秦王が十五城と交換しようと持ちかけた故事を使い、そうした仲立ちはなくとも自分は和氏の璧ほどの價值を持つ人物だと自任していたことを

いう。このように當時順調に行かなかったのは自分の能力のせいではなく、斡旋してくれる有力者の仲立ちがなかったせいだと回想しているのだ。續く二句は貢士として役人に連れられて上京し、何度か科擧の試験を受けたことを示しており、韓愈は實際この頃進士に合格するまで三度落第を重ねていた。その事を婉曲にいったのが次の句で、蘇秦のように十回も上申した程の苦勞は免れたけれども、一回で進士の試験に合格などできるはずもないと述べているが、どんなに才能があっても一回で合格できないのが普通であるから氣にすることはない、と自分に言い聞かせているようにも見える。韓愈はこの詩の中で他にも「名聲 朋友に荷い、援引 姻婭に乏し」(41、42句)などと友人の陰で自分の名聲は傳わったが、出世のための姻戚關係には乏しかったと述べており、目覺ましい榮達を遂げることが出来ないのは能力のせいではなく門地のせいだと言いつつ譯しているのである。韓愈がこのように過去の不遇を人間關係や環境のせいにして回想するのは、今現在においても自分の才幹が失われたわけではないと内心思っていることを示しているよう。

もう一つ、杜甫には見られない韓愈の自己表現の特徴として、周圍とは異質な存在であるとしきりに言及している點が擧げられる。これはそもそも冒頭の二句「少小より奇偉を尙び、平生 悲吒するに足る」がそれを指し示しており、若い頃から「奇」という世人と異なる價值觀を貴んだがために、嘆き悲しむのに事缺かない人生を送っているのだ、というのがこの詩全體のテーマとなつて貫かれている。先に引用した續きの17句目からも、次のように述べている。

人情忌殊異

人情 殊異を忌み

世路多權詐

世路 權詐多し

蹉跎顔遂低 蹉跎として顔遂に低れ

摧折氣愈下 摧折して氣愈いよ下る

冶長信非罪 冶長 信に罪に非ず

侯生或遭罵 侯生 或いは罵に遭う

人情の常として異なる存在を忌み嫌うと述べており、ここでも自分が「殊異」な存在であると規定している。世の中は權謀が渦巻いているため順調に出世できるはずもなく、顔はうつむき意氣もだんだん失われていったが、無實で逮捕された公冶長のように私には全く罪はなく、魏の公子に賓客の禮を受けながら従者には馬鹿にされた侯嬴のように罵聲を浴びせられたりもした、というのも自分が「殊異」であるからこそ受ける仕打ちであり、また、自分自身には何の落ち度もないことが強調されている。このように、「壯遊」と「縣齋有懷」、どちらも自信と自負に満ち溢れた少年時代から出世できずに老いていく過程を描くものの、杜甫が抗うことなく自己の今までの境遇を追認して、老いて何も出来なくなったことを嘆き悲しんでいるのは異なり、韓愈は過去に置かれた境遇に納得しえない自己を描いているのである。

こうした杜甫にはない韓愈の自己表現の要素は、續いて作られた長編回想詩の中でいっそう顯著になってくる。「縣齋有懷」と同じ年に作られた「赴江陵途中寄贈王二十補闕李十一拾遺李二十六員外翰林三學士」は、新皇帝の恩赦に伴い韓愈の罪もやや減免されて陽山から江陵に移ることになったその道中に三人の學士に寄せた詩であるが、最初から強い調子で詩が始まっている。

孤臣昔放逐 孤臣 昔放逐され

血泣追愆尤 血泣して愆尤を追う

汗漫不省識 汗漫として省識せず

韓愈の長編回想詩をめぐって

祝如乘桴浮 祝として桴に乗りて浮かぶが如し
或自疑上疏 或いは自ら上疏せしかと疑う
上疏豈其由 上疏 豈に其れ由あらんや

この冒頭の六句が端的に表しているように、以下四十句ほど延々と回想されている内容はただ一つ、陽山に左遷された經緯に關してである。そしてそれが如何に自分にとって不可解で納得しがたいものであったか、自分が上奏した文章は賞賛こそされ罪を受ける原因になどなり得ないという辨明であるのだ。こうした陽山左遷への憤懣はこの詩のほぼ直後に作られた「岳陽樓別竇司直」の中でも回想されている。その回想部分では以下のようにいう。

念昔始讀書 念う昔 始めて書を読み

志欲干霸王 志は霸王に干めんと欲す

屠龍破千金 龍を屠りて千金を破り

爲藝亦云冗 藝を爲すこと亦た云に冗し

愛才不擇行 才を愛して行を擇ばず

觸事得讒謗 事に觸れて讒謗を得たり

前年出官由 前年 官を出でし由

此禍最無妄 此の禍 最も無妄なり

公卿探虛名 公卿 虛名を採り

擢拜識天仗 擢拜して天仗を識る

姦猜畏彈射 姦猜 彈射を畏れ

斥逐恣欺誑 斥逐して欺誑を恣にす

學問を始めたころは霸王の補佐たらんと高い志をもっていたと、自負心に満ち溢れた少年時代から書き起し、その學んだ學問とは、『莊子』に見える千金を費やして龍を屠るような高尚すぎて實際の役には

立たないものであったと自任している。ここには、自分の身につけた學問は衆多を抜き出して素晴らしいものであったが、しかしまた衆多とは方向性が異なる特異なものであったという、その雙方の思いが表れており、「縣齋有懷」と共通する要素が多い。以下、才能面ばかり愛して行いの善し悪しは氣にしなければならぬ。以下、才能面ばかり、去年陽山に左遷された理由もそこにあるが、この災難こそ最もいわれなきものであり、公卿の間で虚名を博したために天子のお側に抜擢されたものの、奸臣たちは私に弾劾されるのを恐れて無實の罪をでっち上げて私を都から追放したのだ、と續いていく。ここでは「最も無妄なり」、「欺誑を恣にす」といった自分が無實であることへの強い表現が繰り返して用いられており、韓愈にとって陽山左遷がいかに納得のいかないものであったかを物語っている。そして表面的には自分の行動の反省もしているが、自分が世間には理解されない正道を歩んでいるからこそ受ける誹謗であると、自分の正しさを強く訴えているのである。

このように自己の異質さに悲觀するのではなく、居直ったような態度を見せて頑なに自己主張しているところが、杜甫の「壯遊」のように空しく老いていく悲哀を感じさせない一因となっている。もちろん、衆多とは異なる自己の正しさを主張するのは、中國士大夫の傳統からすればごく普通の有り様である。しかし、韓愈の回想詩の中で描かれる自己というのは、その士大夫の傳統的な規範から外れた面も見せているところにその面白さがある。例えば先ほど引用した「赴江陵途中」詩中の有名なくだり、同僚の友人である柳宗元と劉禹錫への疑惑の眼差しである。39句目から、

同官盡才俊 同官 盡く才俊

偏善柳與劉 偏えに柳と劉とに善し

或慮語言洩 或いは慮る 語言洩れ

傳之落冤讎 之を傳えて冤讎に落ちしかと

二子不宜爾 二子は宜しく爾るべからず

將疑斷還不 將た疑うらくは斷めんや還た不や

と、不可解な左遷の原因を、自分の信賴し尊敬する友人のせいではないかと疑っており、いったん疑惑を収めておきながらまた疑心暗鬼に陥るなど、自分の心の動きをそのまま詩に表したかのような表現である。しかも歴史上の人物に假託するなどの手法で婉曲にいわずに直接名指しで詩に書き込んでおり、さらに疑惑を向けた當人たちに直接ではなく別の人に向かって愚癡をこぼしている。いわば小人の持つ心の弱さ、弱い人間が陥りやすい心理状態をありのまま詩に書き込んでおり、同僚に對する尊敬と嫉妬、信賴と疑惑との間を揺れ動く心を描いた從來にない表現といえるだろう。

こうした從來の規範から外れた表現はこの詩の最後でも見られる。「縣齋有懷」の最後は隱遁して農村で靜かな生活を送りたいと述べて詩が終えられるが、「赴江陵途中」でも「深く思う 官を罷めて去り、命を畢えて松楸に依らんと」と述べ、隱逸への思いを空しく懷くばかりでいつ實現できるか分からず、歲月ばかりどんどん過ぎていくと嘆いている。しかしその直後には、次のように續けて詩を結んでいく。

殷湯閔禽獸 殷湯 禽獸を閔れみ

解網祝蛛蝥 網を解きて蛛蝥を祝す

雷煥掘寶劍 雷煥 寶劍を掘り

冤氣銷斗牛 冤氣 斗牛に銷ゆ

茲道誠可尙 茲の道 誠に尙ぶべし

誰能借前籌 誰か能く前籌を借らんや

殷勤謝吾友 殷勤として吾が友に謝す

明月非暗投 明月 暗投するに非ず

殷の湯王のように、小人の讒言で網にかかった自分を救い出して欲しい。雷煥が寶劍を掘り當てて怨みの氣が消え失せたように、寶劍のごとき私の才能を認めて都に呼び戻してこれまでの恨み辛みを消し去って欲しい。眼前の箸を使って計略を立てた張良のような君達は私を推薦してはどうだろう。懇ろに我が友の三學士に申し上げるが、これまで述べた事は明月の珠を暗闇の中で人に投げつけるような突飛なことではなく根據のあることだ。このように結びでは、都への召還と仕官の幹旋をこの三人にしつこく頼み込んでいたのである。ほかに先ほど引用した「岳陽樓別寶司直」でも歸田への願望が詩の最後に述べられているが、この詩では直前に隱遁への思いを口にしながらかつさりそれを翻している。古典文學の様式では一般的に仕官より隱逸の方が價值が高いものとされ、仕官から隱逸へと揺れ動く心情ならよく見られるパターンであるが、隱逸への思いを述べておきながら仕官を頼み込んで詩を結ぶという流れは從來にないのではないだろうか。これは片方が眞で片方が偽という單純なものではないように思える。一個人の感情の動きは文學で様式化されているよりもより複雑である。隱逸の願望もあるがやはり仕官への道も捨てきれないという、從來の規範にとらわれない韓愈の素直な心の動きをそのまま詩に表現したものだと考えられよう。そして、その心の動きというのは、内心誰もが思っているような普遍的な内容でありながら、文學の規範の中では口に出せなかつた類のものである。そうしたせこましい心の動きを躊躇無く

詩に表現しているところに、單なる悲哀の表現とは異なる韓愈詩の面白さが感じられるのである。

この章では陽山縣令への左遷から江陵府法曹參軍の任に着くまでに書かれた三篇の長編回想詩を検討してきたが、杜甫の回想詩が青年の強い志や自負心が時代の波に翻弄されていく中で、むなしく老いていきそれが失われていく内面の變化を描くことに主眼があるとすれば、こうした韓愈の回想詩は、他人の誹謗中傷によって左遷の憂き目にあつても、それに流されずに自己の正しさをしつこく主張し、變わり得ぬ自己の内面を描くこと、そうした周囲とは異質な自己を相手に理解してもらふことに主眼がある。ただ、主眼はそこにありながら、その主張の中には、柳宗元と劉禹錫への疑惑や、隱逸への願望を述べつつ形振り構わず仕官を頼み込むような揺れ動く心、いわばせこましい自己像も躊躇なく見せている。このように、過去の人物に當てはめて自分を慰めるような從來の類型ではなく、ありのままの心の動きを詩に書き表して從來の規範にとらわれない自己の個性を表現しているところが、韓愈の回想詩に見られる自己表現の特徴といえよう。これらの回想詩は、基本的には現在の不遇を嘆くという悲哀の枠組みに入っているものの、その個々の表現には從來の悲哀の枠組みに収まりきれない要素を多分に含んでいるのである。もちろん、杜甫の自傳的な詩を韓愈が發展させたというような方向性で捉えたいわけではない。杜甫が從來の規範から脱却した要素を様々に含んでいるように、韓愈も杜甫という過去の規範から脱却した新しい自身の有り様を示しており、そしてそれが自分の個性が現れ出る表現へとより多様化していることが重要なのである。

四 陽山回想

最後に、前章で引用した三つの詩が作られた翌年、元和元年に長安に召還された際に執筆された「答張徹」を取り上げたい。この詩は張徹から詩を贈られた禮として、その出會いから今日に至る十年間の経緯を書き記したと冒頭から述べる百句の回想詩であるが、その中でも注目されるのは陽山に左遷された頃の回想がなされている點にある。前章で取り上げた詩は左遷されている中でその左遷までに至る回想であったが、それが長安、つまり中央政界へ復歸した後で左遷を回想する場合にはどう認識が變化しているのだろうか。

陽山への左遷は67句目でその道中が述べられるところよりはじまる。まず目に付くのは、「赴江陵途中」や「岳陽樓別竇司直」の回想の中で述べていたような陽山左遷への憤懣が語られないところにある。蠻夷の地に放逐された嫌悪感は見せるものの、自らの無實や正しさを強く訴えるような句は見られない。ここで述べられるのは、蟲などを食らう現地の人々の食事や「刺史 蒼蔡を肅し、吏人 蝗螟を沸かす」といった蠻夷の地での生活ぶりである。こうした蠻夷描寫も興味深い點が多々有るのだが、より注目すべきは77句目より語られる内容にある。

頼其飽山水 頼いに其れ山水を飽し
 得以娛瞻聽 以て瞻聽を娛しましむるを得たり
 紫樹雕斐聲 紫樹 雕りて斐聲たり
 碧流滴瓏玲 碧流 滴りて瓏玲たり
 映波鋪遠錦 波に映じて遠錦を鋪き

插地列長屏 地を插みて長屏を列す
 愁狄酸骨死 愁狄 骨を酸して死し
 怪花酸魂馨 怪花 魂を酸して馨し
 潛苞絳實圻 潛苞 絳實圻
 幽乳翠毛零 幽乳 翠毛零

詳しくは拙論「蠻夷の光景―中唐の異文化受容史―」（『中國文學報』第七十二冊 二〇〇六年）を参照していただきたいが、陽山左遷時期に見られた韓愈の蠻夷描寫というのは、土着の氣候や風土、現地の住民に對する嫌悪感一點張りであった。この詩で述べられるような、その地の山水を飽きるまで楽しむことができたなどとは決して言わなかったのである。第二章で取りあげた「此日足可惜一首贈張籍」では、過去のつらい體驗が回想というプロセスを経ることによって、面白い體驗をした思い出となって語られていることは既に述べたが、この詩でも同様に、過去には嫌悪感しか示さなかった風土に對して、それを山水として楽しんだとよき思い出に變容させているのである。韓愈にとつては中央に復歸して左遷から解放されたからこそ得られた認識ともいえよう。それは作品世界の内部においては、回想という枠組みを設定することによって實現された認識でもあった。

さらに、以下に述べられる山水の様子も、従来の山水詩の枠組みの中には入りきらない表現が見られる。最初の紫色の木々は浮き彫りをしたように重なり合い、碧色の水は珠の音を掻き立てて滴り流れていくというのとはぐくありふれた表現のように見えるが、「紫樹」という言葉は全く前例が無く、以降もほとんど用例が見られない言葉である。花では無く樹木そのものが派手な紫色をしているというのは蠻夷の獨自の自然を表現しようとしたように思わせる。また、「愁狄 骨を酸

して死し、怪花 魂を酸して馨し」というのも美しい山水という枠には入りきらない表現である。猿は南方の自然描寫でよく用いられるモチーフであるが、愁えた猿が骨までも痛めて死ぬというのは凄惨であるし、「怪花」というのも「紫樹」と同じく前例がなく、後世にもほとんど用例のない韓愈の造語である。おどろおどろしさを感ぜさせる怪奇な花々というのは、中原とは全く異なる蠻夷の山水の象徴であろう。「酸」は「醉」に作るテキストもあるが、魂までもむしばんで傷ましめるとする方が蠻夷の自然に對する反應として相應しい。「酸」では凄惨にすぎ、また前句にも同じ字が使われているため「醉」に書きかえられたのかもしれない。そして韓愈はそうした中原とは異なる自然を見て、飽きるまで耳目を樂しませたと回想しているのである。

前掲の拙論の中で「左遷されるというのは中原からすれば異分子と見なされるということであるが、その中で蠻夷という中原とは全く異なる存在にその個人的な價值を認めようとする認識の變化は、左遷された自分の價值観や個性を再認識、再評價することへと繋がる。」と述べたが、このように韓愈が陽山左遷の中で見た異質なものの存在を、回想という過程を経ることによってその價值を認めたことは、第三章で觸れたように自らを異質な存在であると認めている韓愈自身の價值観を再認識することへと繋がる。そして韓愈の中で陽山での左遷の體驗がこのように昇華されたことは、元和十四年、再度蠻夷の地である潮州に左遷されたときに大きな役割を果たしていくのである。

これまで述べてきた内容は韓愈の五言長編回想詩に見える特徴を明らかにしたに過ぎない。最後に挙げた「答張徹」が作られた元和元年には、句数はやや短くなるものの友人との交遊を中心に回顧する七言

韓愈の長編回想詩をめぐって

四十句「憶昨行和張十一」や七言五十句「贈崔立之評事」が續けて作られている。さらに劉禹錫も自傳的な回想詩である「武陵書懷五十韻」を執筆しており、これらと比較検討することで新たな展開が見えてくるだろう。その一方で韓愈が潮州に左遷された際は長編回想詩は書かれていない。長編回想詩がその前半生に集中していることは韓愈に限らず最初に掲げた柳宗元、劉禹錫、白居易、元稹にも言えることであり、杜甫がその晩年において「壯遊」や「百韻」の詩を完成させたのは對照的である。韓愈の、そして中唐の長編回想詩の全體像を明らかにするためにはまだまだ多くの課題が山積みであるが、これらに關しては機會を改めて考察することにした。

注

- (1) どの程度の句数をもって長編と見なすかは意見の分かれるところだが、本稿では韓愈の代表作である「縣齋有懷」の八十句前後を一つの目安とする。
- (2) 排律ではないが、劉禹錫にも「遊桃源一百韻」という仄韻二〇〇句の作品があり、杜甫の影響を窺わせる。
- (3) 以下、杜甫の詩の底本として『宋本杜工部集』（上海商務印書館影印 一九五七年）を、韓愈の詩の底本として『韓昌黎詩繫年集釋』（上海古籍出版社 一九八四年）を用いた。
- (4) 『韓退之全詩集』（日本圖書センター 一九七八年。續國譯漢文大成の影印）上巻二〇八頁。また、韓愈の詩の解釋に關しては和書では他に前野直彬・齋藤茂著『韓退之』（集英社 一九八三年）を適宜参照した。
- (5) 原文「鄭大水、龍鬪于時門之外洧淵」。杜預の注に「時門、鄭の城門なり」とある。
- (6) 例えば、兪瑒に「此の詩の中間の絃次、亦た彭衙、北征の光景を彷彿

- す」や黄鉞に「此の篇頗る老杜の北征に似たり」などと評されている。
- (7) 餘談ながら、第一章の表に掲げた韓愈の長編回想詩の八〇、一〇〇、一一二、一四〇という句数はすべて杜甫の長編回想詩に對應する句数がある。韓愈が杜甫の回想詩を意識した證左となろう。
- (8) 黒川洋一氏が「自京赴奉先縣詠懷五百字」の解説で「：詩人はその悲しみを、わが身一身の上に留めることなく、ひろく世の中の不幸な人たちの上におし廣げて、詩を結ぶ。」(『鑑賞中國の古典』⑩杜甫』七八頁 角川書店 一九八七年)と指摘しているように、こうした趣旨の内容は、吉川幸次郎をはじめとして杜甫の様々な詩の中で言及されている。
- (9) 吉川幸次郎「杜甫私記」(『吉川幸次郎全集第十二卷』三五頁 筑摩書房 一九六八年)の指摘による。
- (10) 第五章「詩の中の自傳」二二六頁。なお、この章では杜甫の自傳詩と韓愈の「縣齋有懷」との連續性に關しても指摘しているほか、様々な箇所で教唆を受けた。
- (11) ほかに「縣齋有懷」5句目の「事業 皋稷を窺う」も、杜甫の「自京赴奉先縣詠懷五百字」4句目の「竊かに稷と契とに比す」を意識した表現である。
- (12) この句で述べられる背景の事實關係については、小野四平「陽山における韓愈―送王秀才序・送區冊序―ノート」(『韓愈と柳宗元―唐代古文研究序説―』汲古書院 一九九五年)一九九頁以下に詳しく考察されている。
- (13) 第二章「陽山における韓愈」参照。
- (14) 一一二頁参照。